

## ちいさき魚は眼にもとまらず

岡本硝子(株) 商品開発本部 知的財産部

新井 敦

**Small fish cannot be caught with eyes.**

**Atsushi Arai**

*Research & Development Div., Intellectual Property Department, Okamoto Glass Co., Ltd.*

### 1. 広瀬川

筆者の故郷は群馬県前橋市である。その市街地の中心部をかすめるように広瀬川というきれいな川が静かに流れている(写真1)。渋川市で利根川から分かれ前橋市街を流れてのち、伊勢崎市で再び利根川に合流している。小さな川であるが一級河川である。

50年も前の、筆者が子供の頃、まだ郊外の巨大なショッピングモールの影も形もなく、広瀬川の近くのアーケード街が生き生きと賑わっていた頃、一方で広瀬川は見映えのしない単なる水の流れてであった。筆者が故郷を離れたあとになって、中心部のアーケード街がシャッター通りへと次第に姿を変え始めるのであるが、その頃から広瀬川の河畔に緑地が整備され、市民が川を眺めながら散歩したりくつろげたりする風情ある憩いの川辺へと変貌していった。

現在、その河畔緑道には多くの詩碑が建てられていて、快適な文学散歩コースになっている。その中の一つに、前橋が生んだ近代詩の巨星・萩

原朔太郎氏(1886～1942)による「広瀬川」が刻まれている(写真2)。川面はきらめき河畔に植えられた柳が風に揺れてとても美しい。川の流れる澄んだ音と潤った空気が実に心地よい。



写真1. 広瀬川と河畔に溢れる緑

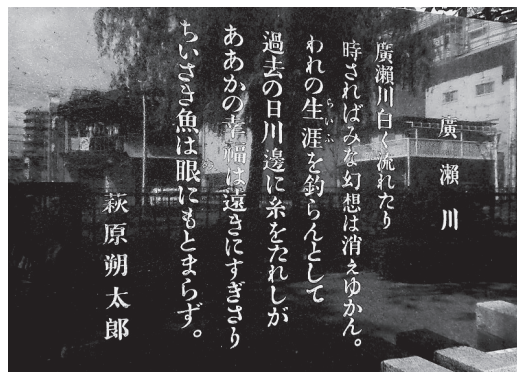


写真2. 詩碑に刻まれた「広瀬川」

〒277-0872

千葉県柏市十余二 380 番地

TEL 04-7137-3128

FAX 04-7137-3135

E-mail: a-arai@okamoto-glass.co.jp

## 2. ちいさき魚は眼にもとまらず

かつて筆者が通学した桃井小学校の校庭の片隅に、萩原朔太郎氏の生家の書齋が保存されていたことや、この「広瀬川」という詩が確か中学生のときの国語の教科書に掲載されていたことや、当時の数学の先生が熱狂的な萩原朔太郎氏のファンで、その熱い語りによって何度も授業が中断されたことなどがあり、その頃から郷土には萩原朔太郎という歴史に名を残す詩人がいたという史実とともに、いくつかの朔太郎氏の作品（詩）の断片が筆者の脳裏に焼き付いていたように思う。前橋市内を舞台にして詠まれた詩も多い。

朔太郎氏は、北原白秋、室生犀星、山村暮鳥らと親交を深め、31歳のときに最初の詩集である「月に吠える」を自費出版し大きな反響を呼んだ。「広瀬川」は39歳のときに発表された「純情小曲集」の中の「郷土望景詩」に収められている。当時、「郷土望景詩」を読んで感動した芥川龍之介が寝巻のまま朔太郎氏の家跳到り込んできた<sup>1)</sup>、とのエピソードが面白い。

さて、問題の「広瀬川」である。

広瀬川白く流れたり  
時さればみな幻想は消えゆかん。  
われの生涯（らいふ）を釣らんとして  
過去の日川辺に糸をたれしが  
ああかの幸福は遠きにすぎさり  
ちいさき魚は眼（め）にもとまらず。

中学生にこの詩が理解できたかどうかは甚だ疑問であるが、当時国語の教科書でこの詩に出会ったとき、筆者の脳天はまるで雷に打たれたかのように痺れたのである。特に最後の一行にである。当時洩垂れ小僧の中学生でありながら目の覚めるような衝撃を受けたのである。

朔太郎氏が広瀬川の畔に物憂げに佇んでいる。かつて朔太郎氏が希望に胸を膨らませ前途

洋々の未来を夢見る若者であった頃は、川に釣り糸を垂れながら自身の幸福に満ちたこれから先の人生をあれこれと思い描き、それらをいつの日かこの手に掴み取ってやろうと熱い意欲に燃えていたのだろう。しかし、今、実際にはあれもこれも思うようにはいかなかった過去を回想して深く物思いに沈んでいる。想像するにこのとき朔太郎氏の心中は既に諦観と老いの境地にあり、若かりし頃に思い描いていた夢や憧憬やら理想や志やらを十分に果たせなかった自身の人生を悲観して失望・絶望の中をさまよっているようである。

あるいは、苦悩や孤独など知らずにいた、明るい未来を信じて疑わなかった若かりし頃を想い浮かべて懐かしんでいるのかもしれない。そんな中、川の浅瀬に一瞬ちいさき魚たちが素早く泳ぎ去る姿を見たのだろうが、その素早い動きに目が追いつかないのである。

そのあまりの素早さに愕然としているのだろうか。

最初と最後の一行は目が現実に捉えた光景そのものである。ただ、この最後の一行は、あまりに唐突にそれまでの文章とは異なる何かを強く発しているように感じ、筆者の目も思考も釘付けになってしまったのである。たぶん、その唐突さは、その最後の一行にこそ朔太郎氏の深い心情や思いが込められているであろうにもかかわらず、表現としては単なる目の前の光景の描写に過ぎないというところから来ているのではないだろうか。おそらく、当時の筆者はその短いたった一行の唐突さに衝撃を受けたのだろう。以来、この歳になっても、やはりこの短い詩のこの最後の一行の重み・深さに感銘を受けるのである。

では、この最後の唐突な一行は何を象徴するのだろうか。「ちいさき魚は眼（め）にもとまらず」である。朔太郎氏はその光景の描写の裏にどんな心情や思いを忍ばせたのだろうか。中学生の頃から約50年間もの間ずっと気になってはいたのだが、何故かこの歳になるまで深く考

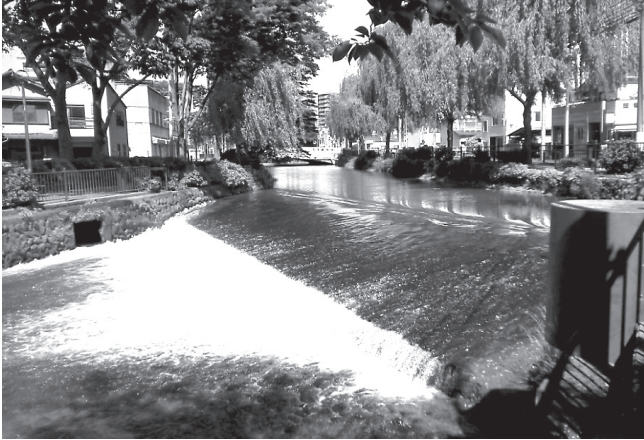


写真3&amp;4. 広瀬川白く流れたり

えてみることをしなかった。素人ながらここでちょっと考えをめぐらせて長年の気がかりを晴らしてみようと思う。

#### 【解釈①】

ちいさき魚たちは自身の夢や憧れであり理想であり、それらがふと見えたとした次の瞬間にはもう既に逃げ去ってしまっていて、幻想に過ぎなかったのかもしれない、もはやこの手に掴み取ることはできないと朔太郎氏は喪失感にうなだれているのだろう。後悔や腹立たしさも感じているのだろうか。あるいは、ちいさき魚たちが眼にもとまらぬ速さで泳ぎ去って行ったように、未来が果てしなく広がっていた夢多き時代も自身の人生もあつという間に儂く過ぎ去って行こうとしていることに希望を失い悲嘆しているのだろうか。ちいさき魚たちの素早さは、時間の過ぎ行く速さそのものを表しているのかもしれない。

#### 【解釈②】

ちいさき魚たちの素早い動きや時間の過ぎ行く速さは、世の中の激動・激変とも置き換えられるのではないか。自身はそのような激しい潮流にはもはや付いて行くことができず、世の中に世間に振り回され翻弄されふと気が付けば独

り自身だけがポツンと取り残されてしまったような孤独感・寂寥感を抱いているのか。さらに、世の中の激流にはもうこれ以上追従できず、老いた自身には今さら夢や理想を追いかける力など残ってはいないと失意し茫然としているのかもしれない。

#### 【解釈③】

ちいさき魚たちの素早い動きは、眩しいほどの若々しさや弾けるようなエネルギーを象徴しているのではないか。自身の時代は終わろうとしていると、これからは若い人々の時代でありもはや老いてしまった自身の活躍できる場所も居る場所さえもないと悲観し、若さを羨み、また一方では自身にもあのように若さに溢れ生き生きと輝いていた時代があったであろうにもかかわらず、自身はいつの間にか何を誤ってこのように落ちぶれて老いてしまったのか、こんなはずではなかったのにと自責と悔恨の念を抱いているのかもしれない。

#### 【解釈④】

自身の人生はもう終焉を迎えようとしているが、気力にも体力にも満ち満ちた未来ある若きちいさき魚たちに、すなわち自身の子を含めた若者たちにこれからの新しい時代を託そう、自身は満足に志を果たすことができなかつたがこ



れからの君たちは是非夢を追いかけて幸福になってほしい、さあ自由に好きなように逃げて行け、といった願いも込めたのだろうか。

以上は専門外である筆者の勝手な解釈と理解ではあるが、もしかすると当たらずといえども遠からずであろうか。上述の四つの解釈の中に正解に近いものがあれば、あるいは四つの解釈案のいずれかの折衷であっても嬉しい。是非、専門の先生による解説を賜りたいと願う次第である。

「広瀬川」は朔太郎氏が39歳の時に発表された詩である。天才であるが故に、と言い切ってしまうと良いかどうかは分からないが、随分若いうちから苦悩と孤独に苛まれた人生を送ってきたことが窺えるような気がする。

筆者としては、これまで「広瀬川」を直感的に「人生で一番感動した詩」、「強く印象に残っている詩」で済ませてきてしまっていたが、この機に自己流ではあるが初めて考察を加え誠に恥ずかしながらも解釈を講じてみる事ができた。それなりにすっきりした感はある。少なくとも長年の煩いがいぶ薄れたような気がする。今、改めてこの「広瀬川」をゆったりと鑑賞し、最後の一行の感触を堪能し感慨を深めている次第である。

### 3. 志は果たしたか

朔太郎氏は55歳で永眠している。筆者は18歳のときに故郷を離れ、朔太郎氏が「広瀬川」を発表した39歳という年齢を過ぎ、朔太郎氏が逝去した55歳を超え、現在は東京で生活する62歳となった。人並みの苦労や苦痛は経験中であるにせよ、幸いにも朔太郎氏とは異なり、凡才としてまずまず穏やかな人生を送らせていただいているのだろうと思う。

実はしばらく前から「広瀬川」と同じくらい気になっている童謡がある。「故郷(ふるさと)」であり、その3番の歌詞である。



写真5. 利根川と群馬県庁  
奥に赤城山を臨む

こころざしを果たして  
いつの日にか帰らん  
山は青き故郷  
水は清き故郷

と詠っている。

作詞者の出身地である長野県中野市を詠った歌詞であるらしいが、前橋市と置き換えてみてもまさにそのままである。

筆者は大学3年生の時に初めてガラスに出会った。故森谷太郎先生によるガラスの講義を拝聴しガラスに興味を抱いた。ガラスで飯を食って行こうと決意した。21歳のときである。

以来、40年以上が過ぎ、一応ガラス一筋の人生を送ってきている。もちろん初めて「広瀬川」に出会った頃にふんわりと心に浮かんでいた淡い夢や憧憬は、その後の実社会での苦難や試練に擦り減らされていつの間にか霧散してしまった。ちいさき魚のように逃げて行ってしまった。だが、いつからか前を向いて、小さな歩幅ではあったかもしれないが一步一步着実にガラスの道を歩んできたのではないかと押しも押されもせぬ諸先輩や諸先生方による輝かしいガラス道に比べればまさしく吹けば飛ぶようではあるが、小さな浅い足跡をしかし堂々と残してきたのではないかと。

「故郷」の3番は筆者自身に唄いかけてい

るような歌詞であり、「志は果たしたか」と問われている。青き赤城山、榛名山、そして清き利根川、広瀬川を擁する美しい自然に囲まれた故郷に思いを馳せながら、自分自身に問いかけ続けてきている。幸いにまだ道は続くようである。最期の最期に筆者自身に「志は果たせたよ」と言ってあげられるように、残りの人生を歩んでいきたいと思う。そして、ガラスの道で出会った数え切れないほどの懐かしい顔たちに心から感謝しよう。

先日、久しぶりに故郷を訪れた。広瀬川の河畔をゆっくりと散策することもできた。「広瀬川」の詩碑にも触れた。さわやかな風に揺れる柳とどこか懐かしい澄んだ川の音に癒された。前橋市のキャッチフレーズは「水と緑と詩のまち」である。筆者の故郷である。

**【参考】**

- 1) 青猫－萩原朔太郎詩集 集英社文庫
- 2) 萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち前橋文学館  
<http://www.maebashibungakukan.jp/>